座談会

軸と修正力を育むために 学校という「社会」をデザインする

本誌8月号の特集記事では、変化の大きな時代を生き抜くために必要な力として「軸をつくる力」「修正力」を取り上げた。学校現場はこの記事をどのように受け止めたのか。この座談会では、それぞれの学校で行われてきた取り組みと照らし合わせながら、10年後の社会を生き抜く人材を育成する学校像を検証してみる。

軸と修正力を育むのは自己肯定感と多角的な視点

編集部　8月号の特集では、10年後の社会を生き抜くために必要な力として、確固たる目標、信念、こだわりといった「軸」をつくる力と、柔軟に変化に対応し、目標までのプロセスや目標到達のための手段、時には目標そのものを「修正」する力を取り上げました。まず記事の印象から教えてください。

定金　ICTの進歩などによって、新しい職業が誕生し、大学生でも職業の内容を理解し、自分に合ったものを見つけることは簡単ではない時代です。「やってみないと分からないこと」が社会に増えている中、生きることは考え続けることなのだということを高校生に伝えるべきだという点で共感しました。

吉見　見通しが立ちにくい時代、モノがあふれる社会に生徒が生きています。豊かだからこそ、生徒は与えられることに慣れてしまい、学校でも「先生、○○が足りません」「××がほしいです」と声は上げるけれど、自分で探したり、工夫して何かを作ったりすることが出来ません。自ら動き、状況を変えなければいけないという意味で、「修正力」という言葉は心に響きました。

篠山　社会経験が乏しいまま、高校生がこだわりを持つことは、進路の選択肢を狭めてしまう恐れがあります。進学でも就職でも「やってみないと分からないこと」があるということを理解し、経験を積みながら、徐々に「軸」を見いだしていくこ

大阪産業大　教養部教職課程　准教授
定金浩一　さだかね・こういち
教職歴33年。兵庫県立西宮香風高校校長などを経て、2014年度より現職。臨床心理士。

長野県・私立エクセラン高校

◎設立　1952（昭和27）年
◎形態　全日制／普通科（園芸農業、生活文化、国際理解、環境科学の4コース）美術科、福祉科／共学
◎生徒数　1学年約120人
◎14年度入試合格実績（現役のみ）公立大は、長岡造形大、私立大は、東海大、東北芸術工科大、日本福祉大、帝京科学大などに8人が合格。このほか、短大、専門学校に37人が合格。また、卒業生のうち45人が就職。
◎住所
〒390-0221 長野県松本市里山辺4202
◎電話　0263-32-3701
◎Web Site　http://www.excellent.ed.jp/

栃木県立栃木高校

◎設立　1896（明治29）年
◎形態　全日制／普通科／男子
◎生徒数　1学年約240人
◎14年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、宇都宮大、千葉大、東京工業大、名古屋大、京都大などに137人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ454人が合格。
◎住所
〒328-0016 栃木県栃木市入舟町12-4
◎電話　0282-22-2595
◎Web Site　http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochigi/nc2/

とが大切になっています。社会の変化のスピードが速くなる中で、新しい環境に飛び込んでも自分を見失わず、そこで求められる自分の存在価値を示していく力が必要であり、それも修正力の1つだと思いました。

定金　記事の中で特に印象的だったのが、社会人のインタビューです。リストラや配置転換など予想外の事態に、前向きなエネルギーと粘り強さで向き合う姿には、これからの生徒に必要な軸の強さと柔軟な修正力を感じました。

吉見　見通しが立たなくても、目の前のことをしっかりやっていれば歩むべき道が開けていくことをリアルに教えてくれる事例でした。生徒にこそ読ませたい記事だと思いました。

篠山　3人の社会人は自己肯定感が高く、自分が置かれた状況を多角的な視点で解釈していました。生徒も、社会に出た時、先が見えない岐路に立つことがあるでしょう。その時、悩みながらも自分なりの答えを出して前に進むためには、同じように自己肯定感と多角的な視点が必要なのだと思いました。

栃木県立栃木高校
篠山秀志　しのやま・ひでし
教職歴30年。同校赴任5年目。栃木県立佐野高校などを経て現職。担当科目は化学。SSH推進委員会委員長。

長野県・私立エクセラン高校
吉見繁憲　よしみ・しげのり
教職歴19年。長野県公立高校での勤務を経て同校へ。勤務12年目。3学年主任。担当科目は数学。

生徒のものの見方を広げる場面を意図的につくる

編集部　先生方は、軸をつくる力、修正する力を日々どのように育まれているのでしょうか。

定金　進路指導では、興味のあることを大切にしながらも、別の分野にも関心を向けることで、多角的な視点を身に付けさせてきました。オープンキャンパスでも、あえてあまり関心がなかった学問にも接してみるように勧めました。実際、「先生に言われて参加してみたら、学問の印象が変わりました」と感想を話す生徒は少なくありませんでした。

吉見　よく生徒に「頑なにならずに、いろいろな出会いを楽しむ中で、より自分に合った選択肢が見つかることもある」と話しています。進路選択ではそうした気持ちの余裕を持たせたいと思っています。

篠山　授業中のちょっとした雑談も、知的好奇心を広げる良い機会です。例えば、日本の研究者や技術者がどんな努力をしているかを話すことで、学問の面白さを知る生徒もいます。「自分のやりたいことが、考えたこともなかった学部・学科でも学べるのだと、先生の話を聞いて気が付きました」と言ってくる生徒もいました。生徒の内面にある既成概念を揺さぶりながらじっくりと軸をつくった方が、しなやかで折れない軸が生まれる気がします。

定金　やはり生徒には試行錯誤が必要です。その生徒にぴたりと合ったものを示すことも可能ですが、ちょっとずれているけれど気になるものを示して、試行錯誤させたいですね。そして、試行錯誤した自分を生徒に語らせることが大切です。生徒は話すことによって、自分の考えを整理しますから。

吉見　あの仕事がいい、この大学がいい、いや、やはりこちらが……とあれこれ迷う気持ちを教師がしっか

ベネッセ教育総合研究所
『VIEW21』高校版副編集長
竹内正興　たけうち・まさおき

り聞くことで、生徒の軸が次第に出来上がっていくのだと思います。

篠山　軸の有無が最も問われる場面が、第2、第3志望の進路を考える時でしょう。第1志望はいろいろな要件が満たされているけれど、第2、第3志望を考える中で自分の軸が見つかることがあります。第1志望とは別の観点で第2、第3志望の魅力を生徒が説明できるようになれば、それは生徒が、人生の可能性を複線化したことを意味し、修正力の土台が出来たと言えます。

吉見　まず、私たち教師が「志望が下がれば合格の可能性は高くなるが、代わりに満足度も低くなる」という前提を捨てなければいけませんね。

篠山　そのためには教師も、大学の難易度やネームバリューに惑わされず、「自分が育てた教え子が通うのにふさわしい大学なのか」を見極める冷徹な目を持ち、情報を収集することが必要ですね。

学校という枠の中で生徒の世界を社会化する

編集部　目標を掲げ、そこに到達するプロセスを検証し、必要に応じて修正する場として、学校行事や部活動も重要だと考えられます。

定金　私は、行事や部活動は、将来社会で自分がどう生きていくかを考える「小さな社会」なのだと思っています。生徒が自分で考え、自己決定していく場を学校の中につくることが大切ではないでしょうか。学校という枠の中で、出来る限り生徒が自由に活動することで、生徒は交渉したり、我慢したり、視点を変えたりと、社会で必要な普遍的な生きる力を身に付けることが出来ます。枠の中にも、「自由に出来る部分はたくさんある」ということを生徒に伝えることが大切です。

篠山　行事が盛り上がる学校ほど、生徒の思いが学校と衝突することもあるものです。そうした機会を捉え、生徒が大人である教師や保護者と話し合う場面をつくることが大切です。社会に出れば当たり前にある「縦の関係」の中で、大人の論理に出合う場面です。生徒に価値観の多様性を期待するのであれば、大人としての信念と、生徒とぶつかる覚悟が必要でしょう。

吉見　教師が生徒の意思決定を尊重する態度を貫くことも大切だと思います。教師が判断した方が確実で、しかもスムーズなケースはたくさんありますが、私は可能な限り生徒に「どうすればよいか自分たちで考えてみて」と伝えています。高校は自分たちが主役の社会なのだということを3年間掛けて体感させることで、生徒は少しずつ主体的に活動できるようになると思います。

定金　心に火がともり、主体的に動く生徒が出てくると、その火は他の生徒に燃え移り、「自分も同じようになりたい」と考えます。集団の中での行動特性を活用して、行事を通して軸と修正力を育みたいですね。

教科指導力が生徒の自己肯定感を高める

篠山　行事を通して様々な成功体験を積み重ね、リーダーシップやフォロワーシップを発揮することで、生徒は次第に自己肯定感を高めていきます。一方で、高校生はちょっとしたことで自信を失うことがあります。そうした生徒が再び自信を取り戻す格好の場となるのも行事や部活動です。

定金　どの生徒もちょっとしたきっかけで大きく変わる可能性を秘めていますからね。中学校ではずっと不登校だった生徒が、高校で大きく変化し、学校行事の中心人物にまでなったこともありました。高校に通っている以上、どの生徒も「成長したい、変わりたい」と願っています。面談などで、既にうまく行っている部分や、生徒の力や強さを見つけ出し、それを拡大し発展させるこ

とを心掛けたいですね。

吉見　部活動や学校行事の良さは、周囲との関係の中で「自分は必要な存在だ」と確認できることです。それが自己肯定感につながると、生徒はいつしか自分を他人と比べる以上に、昨日までの自分と比べるようになります。そうなれば、社会に出た時にも突然の環境変化に焦ることなく、次に目指すべき自分に向き合うことが出来るはずです。

篠山　それぞれの生徒に合った自己肯定感の高め方を、教師が見極めたいですね。生徒によっては、あえて高い壁に直面させて失敗させることで、達成感の質を高めた方がよいこともあります。

定金　当然、授業も手段の1つですよね。問題に粘り強く向き合うことで得られた自己肯定感は、社会に出てからも必要なものです。

篠山　教科学習の場面で自己肯定感を得させるためには、まさに教師の教科指導力が問われます。的外れに思える意見や解答も「その着眼点は面白い。なぜなら……」と多角的な解釈で授業をまとめ上げていくのは、まさに教師の授業修正力であり、生徒の多角的な視点の育成にもつながります。また、そうした教師であってはじめて生徒の信頼を勝ち得ることができ、部活動や行事の場面でも生徒としっかりと向き合うことが出来ると思います。

吉見　学習面で自信がない生徒に対しては、授業の受け方やノートの取り方など小さなルールを順守するように徹底することが大事だと思います。授業の中の基本ルールが守れるようになったことを教師が認め、褒めることが、生徒の自信になるからです。逆に言えば、教師が授業のルールをあいまいにしてしまうことは、生徒の努力を評価する機会を失っているわけです。

生徒自身が成長を実感できる工夫を

編集部　先生方のお話を伺って、生徒が自分の成長を確認し、自己肯定感を高めていく仕掛けが重要なのだと思いました。

定金　面談でも、教師が「ここが駄目」「こうしなさい」と一方的に話すのではなく、生徒にどうしたいかを考えさせ、それを生徒自身に語らせ、教師はそれを前向きな言葉で励まし、生徒の行動を促すべきです。

吉見　生徒の言葉を待つことは教師にとって楽ではなく、ついあれこれと指示をしたり、答えを先に言ってしまったりしがちです。生徒の言葉を待ちきれた時に、生徒が大きく変わるのだと信じたいですね。

篠山　褒める時は、本人が納得できる事実を基にしなければ、生徒に自信を与えることは出来ません。口先だけで褒めていても、見破られてしまいますから。

定金　私は生徒自身に課題を整理させ、その上で「今の自分が出来ること」を考えさせていました。そして、スモールステップで少しずつ目標を高く設定し、その目標をクリアさせることで、達成感を味わわせることを繰り返していました。また、学習の記録などで生徒の変容を可視化し、具体的に褒めるのもよいでしょう。生徒を動かし続けるには、自己肯定感を土台にした内発的な動機が欠かせません。内発的な動機が十分であれば、生徒は高校生活で壁に直面しても自ら修正するはずです。

吉見　面談で生徒の言葉に真摯に耳を傾け、私たち教師も生徒から何かを学び取ろうという姿勢を持ち続けたいと思います。同僚の先生方とは「1日1つ、生徒から何かを学べたら、それは私たちの成長ですね」と話しています。そうした気持ちが生徒の言葉を引き出すはずです。

篠山　高校教師の仕事の1つが、知識と学び方を「教え込む」ことである以上、教師には、生徒よりも高い目線と豊かな知識を持ち、生徒を導くことがこれからも変わらず求められます。ただ、変化の大きな10年後を生き抜くためには、教師の役割はそれだけにとどまりません。生徒の視点、生き方は多角化・複線化しているか、自身の小さな成長を確かめているかを、生徒の言葉を引き出しながら確認していくことが、これからは重要になってくると思います。